

## 中学校国語科検定教科書における伝記教材の考察

——昭和24～26年度の場合——

幾 田 伸 司\*

### 1 は じ め に

戦中に編集・刊行された国語教科書には、忠君愛国といった国家主義的思想を積極的に支持し、それに感化させるための教材が多く見られる。戦後教育は、そうした傾向を払拭し、敗戦によって挫折した日本の近代化を再度進めることを目標として出発したととらえてよいだろう。たとえば、文部省が『新教育指針』で示した状況認識はそうした教育観の典型である。<sup>(1)</sup>

明治維新以来の日本は、西洋文化を急いで取り入れ、それによつて近代化した。けれどもそれは主として西洋文化の物質方向、もしくは外がはの形式を學んだのであつて、その根本の精神、またはその中にある實質はまだ十分に取られてゐないのである。(中略)

このやうに日本の近代化は中途半端であり、とくに近代精神の本質として後に述べるやうな諸點については、きはめて浅い理解しか持つてゐない。それにもかかはらず、すでに西洋文化と同じ高さに達したと思ひこみ、それどころか、精神方面においては、東洋人の精神、とくに日本人の精神の方がすぐれてゐると思ふ人があつた。かうした誤つた考へをもつた人々が國民の指導者となつて、西洋の文化を輕んじ、その力を低く見て、戦争をひき起こし、國民もこれにあざむかれて戦ひ、ついに敗れたのである。そこに日本の弱點があり、國民の大きなあやまちがあつた。われわれは日本國民の長所である包容力、同化性をもつとよくはたらかせて、西洋文化をその根本から實質的に十分取りいれ、それを自分のものとして生かすやうにつとめなくてはならない。

---

\* 広島経済大学経済学部助教授

こうした精神面の近代化を進めるにあたっては、近代的な精神を体現する、模範とすべき人間像を描くことが必要となる。『新教育指針』では、そうした模範的な人物の例として、キュリー夫人、野口英世、豊田佐吉、エジソン、ジェンナーなどの名前が挙げられている<sup>(2)</sup>。

国語科の教材の中で、学習者の模範となるこうした人物像を提供するジャンルとしては、伝記が考えられる。伝記教材では、教科書が目ざす近代的精神を反映させた人物が取り上げられ、それらが模範的人物像として学習者に示される。そこで、本稿では、教科書が重視する近代的精神がより直接反映していると考えられる伝記教材を対象とし、そこに描かれた人物像の検討を行う。

本稿では、昭和24～26年度に刊行された中学校教科書11社13種（〈表1〉）について、採録された伝記教材の特徴を検討する。これらは、昭和22年版学習指導要領（試案）のもとで刊行された、戦後最初期の検定教科書である。この時期は教材の模索期にあり、いわゆる安定教材と呼ばれる、評価の定まった教材が確定していない。それゆえ、戦後初期のこの時期に適切だと編集者が考える、多様な教材が採録されていた。この時期の教材を検討することは、戦後初期に、教科書がどのような人間像を描こうとしたかを検討することになる。

以上の点をふまえ、本稿では、戦後初期の中学校検定教科書に採録された伝記教材の検討を通して、教科書に描かれた人間像がどのようなものであったかについての考察を行う。

表1 昭和24～26年度に刊行された中学校検定教科書一覧

出版社	教科書名	編集者	発行	終了	1年	2年	3年
日本書籍	国語生活	斉藤清衛	26	26			
東京書籍	新しい国語	柳田国男 他	25	27	25-26	25-27	26-27
中教出版	国語の教室	新教育研究所	25	28	25-28	26-28	26-28
教育図書	国語	教育文化研究会	24	29	24-27	25-28	25-29
学校図書	中等国語	久松潜一	26	26			
二葉	新国語	熊沢龍 他	25	26	25-26 <sup>(*)</sup>	26	26
秀英出版	私たちの国語	市古貞次 他	24	26	24-26	25-26	25-26
	私たちの国語	市古貞次 他	26	26			
三省堂	中等国語	金田一京助 他	25	30			
	中学新国語	土井忠生	26	30			
富山房	新生国語	波多野完治 他	25	26	25-26	26	26
市ヶ谷	中学現代国語	成城国文学会	26	28			
大修館	中学国語	能勢朝次	25	27			

○学年によって刊行年度が異なる場合は、各学年欄に刊行期間を別途記載した。

\*1 二葉「新国語」は、S26年度に教科書番号の変更あり。

## 2 先行研究の成果と課題

教科書に描かれた人物像は、唐澤富太郎（1956）や片岡徳雄編（1987）所収の諸論によって検討が行われている。

唐澤は戦前・戦後の小学校国定教科書を検討し、教科書がどのような人物像を描いてきたかを考察した。唐澤によれば、戦前の国定教科書に登場する人物は、二つの系統にまとめられる。

一つは絶対主義的国家の君臣像を打ち出している人物達であって、具体的には、明治天皇と二宮金次郎が代表的なものとして登場している。臣民は更にこれを各社会層において特殊な形をとる（後略）。この性格の人物達は、いわば絶対主義国家に於ける臣民教化の意図に沿って取り挙げられたという点で、言わば上から与えられた人物と言えるであろう。

これに反してもう一つの系統に属する人物は、豊臣秀吉、源義経、大国主命などに代表される、日本の民衆の間に愛好され育てられてきた人物達である。

（唐澤（1956）pp. 730-731）

それに対して、戦後の社会科・国語科の教科書に登場する人物の類型は次のようにまとめられる。

さてこれらの登場人物を通して言えることは、戦後の国定教科書が、「文化国家」という日本の新目標に即応して、文化尊重の傾向が著しく、それが文化人の増加となって現れていると言うことである。就中、文化と言っても、その多くは、表面にあらわれた文化財を問題とするよりも、主としてヒューマニズム的な人間の内面的なものを取扱って居り、そこで文化尊重が人権尊重、平和愛好というものに結びついて現れている。

（唐澤（1956）p. 734）

こうした唐澤の考察は、主として小学校国定教科書を対象としたものである。したがって、本稿で取り上げる中学校検定教科書に直接結びつけることは控えるべきであろう。ただし、昭和20年代前半というほぼ同時期の教科書を対象とした考察を、この時期の教科書の傾向を示す指針としてとらえることはできる。

戦後の中学校教科書までを含めた検討としては、戦前・戦後の小・中学校教科書に登場する人物について包括的な調査・考察を行った、大膳司（1987）がある。大

膳によれば、戦後の中学校教科書では、外国人や架空人物の登場が戦前より増加している。登場人物の職業は、戦前には「政治家を筆頭とする、エリートタイプの人物」が多く、戦後には「青少年や勤労者のような、大衆的人物、日常的人物」が相対的に多い。登場人物のパーソナリティーは、戦前では父性原理で描かれた人物が多く、戦後は母性原理で描かれた人物が多い。これらの人物は戦前・戦後とも一貫して外向的性格であるが、価値指向は自己成長型、社会・倫理型の割合が戦後は高くなっている<sup>(4)</sup>。ただし、こうした大膳の考察は、昭和23-56年度までの国定・検定教科書を、すべて同列に扱って総体的に検討しており、時期別の検討は行われていない。また、対象とした検定教科書は光村図書・三省堂の二社の大改訂時のものに限定されている。前述のように、昭和20年代前半には13種の中学校教科書が刊行されているが、光村図書の刊行はなく、三省堂は2種が刊行されている。大膳の考察はこの時期の教科書の一部を扱ったに過ぎず、当時の教科書全体の状況についてを明らかにしているとはいいがたい。

以上の点をふまえ、本稿では、唐澤、大膳の考察では検討が不十分であった昭和20年代前半の中学校検定教科書を対象として考察を行うこととする。

### 3 戦後初期検定教科書伝記教材のモデル人物の傾向

昭和24-26年度に刊行された中学校検定教科書に採録された伝記教材は、〈表2〉に示した70教材である<sup>(5)</sup>。教科書によって採録数に差はあるものの、13種の教科書すべてに採録があった<sup>(6)</sup>。これらの伝記教材でモデルとして取り上げられた人物を職種別に分類したものが〈表3〉である。

〈表3〉に示されているように、この時期の中学校検定教科書の伝記教材では学者・芸術家の採録が過半数を占めており、文化人重視の傾向が顕著である。これは、唐澤が同時期の小学校国定教科書の傾向として指摘した特徴と重なる。また、学者の中でも自然科学者の比率が人文・社会科学者よりも高くなっており、当時は自然科学を重視する傾向が非常に強かったと言える。

また、日本人に比べて西洋人の比率が高いことも唐澤の考察と一致する傾向である。検定教科書で取り上げられた日本人のモデル人物は福沢諭吉、二宮尊徳、新渡戸稲造、北里柴三郎、野中至、宮沢賢治、ジョン万次郎、伊能忠敬、浜口五兵衛の9人にすぎない。西欧文明との架け橋となって明治以降の近代化に貢献した福沢諭吉・新渡戸稲造・ジョン万次郎、細菌学者として世界的に認められた北里柴三郎など、日本国内にとどまらず、世界との関係の中で功績を上げた人物が半数近くを占める一方、戦前までの教科書に多く採録されていた日本人の武人・軍人、政治家は

表2 昭和24-26年度中学校検定教科書の伝記教材一覧

モデル	略号	教科書名	学年	使用	作者	タイトル
ピューピン	三省堂	中等国語	2	25	井野川潔	人はなんのために
アンデルセン	富山房	新生国語	2	26	アンデルセン	アンデルセンの幼いころ
伊能忠敬	富山房	新生国語	2	26	武藤勝彦	伊能忠敬と高橋父子
ウォーター=ジョンソン	秀英	私たちの国語	1	26	星野龍猪	速球王
ガリレオ	富山房	新生国語	2	26	菅井準一	ガリレオ
北里柴三郎	市ヶ谷	中学現代国語	3	26	森本薫	北里柴三郎
キュリー夫人	教図	国語	3	25	エーブ・キュリー	キュリー夫人
	二葉	新国語	1	25	水島あやめ	希望の門出
	二葉	新国語	1	26	水島あやめ	希望の門出
	大修館	中学国語	3	25	湯浅年子	キュリー夫人
クラーク	日書	国語生活	2	26	大島正健	クラーク先生
ゲーリッグ	三省堂	中等国語	1	25	タカギシンジ	名選手ゲーリッグ
	富山房	新生国語	1	25	高木眞二	ゲーリッグの一生
ザメンホフ	二葉	新国語	1	25	上沢謙二	エスペラントの父
	二葉	新国語	1	26	上沢謙二	エスペラントの父
シューベルト	秀英	私たちの国語	3	25	野村長一	シューベルト
	秀英	私たちの国語	3	26	野村長一	シューベルト
シュバイツェル	三省堂	中学新国語	2	26	吉江喬松	アルバート・シュバイツァー
	富山房	新生国語	1	25	吉江喬松	アフリカの英雄
デュナン	三省堂	中学新国語	3	25	高橋巳寿衛	世界をつなぐ
ジョン万次郎	学図	中等国語	3	26	井伏鱒二	ジョン万次郎漂流記
スコット	富山房	新生国語	2	26	中野好夫	氷原にはためく黒い旗
ストウ夫人	秀英	私たちの国語	1	24	山本有三	ストウ夫人
	秀英	私たちの国語	1	26	山本有三	ストウ夫人
ソクラテス	富山房	新生国語	3	26	菅支那子	ソクラテス
ダーウィン	秀英	私たちの国語	3	25	駒井卓	ダーウィン
	秀英	私たちの国語	3	26	駒井卓	ダーウィン
デーヴィー	三省堂	中学新国語	2	26	広瀬基	デーヴィー
新渡戸稲造	秀英	私たちの国語	3	25	石井満	太平洋の橋
	秀英	私たちの国語	3	26	石井満	太平洋の橋
二宮尊徳	二葉	新国語	1	25	加藤武雄	母をいたわる
	二葉	新国語	1	26	加藤武雄	母をいたわる
ニュートン	学図	中等国語	1	26	石原純	ニュートン
ノーベル	三省堂	中等国語	2	25	高橋巳寿衛	ノーベル伝
	三省堂	中学新国語	3	26	高橋巳寿衛	ノーベル伝
野中至	秀英	私たちの国語	3	25	橋本英吉	富士山頂
	秀英	私たちの国語	3	26	橋本英吉	富士山頂
	富山房	新生国語	1	25	橋本英吉	富士山頂
	市ヶ谷	中学現代国語	3	26	橋本英吉	富士山頂
	大修館	中学国語	3	25	橋本英吉	富士山頂
ハイドン	市ヶ谷	中学現代国語	1	26	勝見勝	パパ・ハイドン

モデル	略号	教科書名	学年	使用	作 者	タイトル
パスカル	富山房	新生国語	1	25	串田孫一	考えるあし
バストゥール	東書	新しい国語	3	26	林 麟	細菌とたたかう
	富山房	新生国語	2	26	桶谷繁雄	ルイ・バストゥールのことば
浜口五兵衛	大修館	中学国語	2	25	小泉八雲	浜口五兵衛
ファールブル	二葉	新国語	3	26	ファールブル	働く手
	秀英	私たちの国語	2	25	ファールブル	おいたちの記
	秀英	私たちの国語	2	26	ファールブル	おいたちの記
	市ヶ谷	中学現代国語	2	26	山田吉彦	おさないファールブル
福沢諭吉	中教	国語の教室	2	26	西村孝次	福沢諭吉
	富山房	新生国語	2	26	福沢諭吉	福沢諭吉の勉学時代
	市ヶ谷	中学現代国語	3	26	浦上五六	青年時代の福沢諭吉
フランクリン	日書	国語生活	3	26		フランクリンと図書館
	二葉	新国語	3	26	フランクリン	わたくしのおい立ちとことば
	市ヶ谷	中学現代国語	1	26	ホーソン	よい結果はよいしゅだんで得られる
ベートーベン	東書	新しい国語	2	25	片山敏彦	英雄交響曲
	秀英	私たちの国語	1	24	片山敏彦	月光の曲
	秀英	私たちの国語	1	26	片山敏彦	月光の曲
ベーリング	学図	中等国語	2	26	高橋巳寿衛	エミール・ベーリング
ペスタロッチ	富山房	新生国語	1	25	小田武	ペスタロッチ
ヘレン・ケラー	教図	国語	2	25	ヘレン・ケラー	私の生活
宮沢賢治	三省堂	中学新国語	3	26	草野心平	雨ニモマケズ
モーツァルト	三省堂	中等国語	1	25	野上弥生子	幼き天才
ラエネク	市ヶ谷	中学現代国語	1	26	平沢興	医師ラエネクの発見
リビングストン	学図	中等国語	2	26	阿部知二	アフリカの父
リンカーン	中教	国語の教室	2	26	野辺地天馬	リンカーンの逸話
	教図	国語	3	25	矢内原忠雄	リンカーン
	二葉	新国語	1	25	沢田謙	リンカーン
	二葉	新国語	1	26	沢田謙	リンカーン
レントゲン	大修館	中学国語	3	25	高橋巳寿衛	ヴェルヘルム・レントゲン

完全に排除されている。こうした傾向も、小学校の傾向と重なっている。

西洋人のモデル人物は、学者、芸術家のように人類全体に対する寄与を果たした人物が多く、シュバイツェル、デュナンなど、国際的な人道活動に従事した人物も取り上げられている。一方、一国内での利益のみに貢献した人物の頻度は少ない。フランクリン、リンカーンなどはアメリカ国内での活動が主であるが、民主主義の確立に対する貢献を考慮すれば、その活動は広い意味で世界的意義を持つととらえることができよう。

以上、伝記教材のモデル人物について言えることは、科学や芸術といった文化的活動、国際的な貢献、全人類に対して寄与するような功績が重視されていることで

表3 昭和24-26年度中学校検定教科書に採録された伝記教材のモデルの職種

職 種	採録数	モ デ ル
学者（自然科学）	24	ガリレオ・北里柴三郎・キュリー夫人（4）・ダーウィン（2）・デーヴィー・新渡戸稲造（2）・ニュートン・ノーベル（2）・パストゥール（2）・ピューピン・ファール（4）・ベーリング・ラエネク・レントゲン
芸術家（作家・音楽家）	11	アンデルセン・シューベルト（2）・ストウ夫人（2）・ハイドン・ベートーベン（3）・宮沢賢治・モーツァルト
学者（人文・社会科学）	7	ザメンホフ（2）・ソクラテス・パスカル・福沢諭吉（3）
政治家	7	フランクリン（3）・リンカーン（4）
技術者	6	伊能忠敬・野中至（5）
社会教化者	6	シュバイツェル（2）・デュナン・二宮尊徳（2）・ヘレン＝ケラー
スポーツ選手	3	ウォーター＝ジョンソン・ゲーリッグ（2）
教育家	2	クラーク・ベスタロッチ
探検家	2	スコット・リビングストン
市井の人	2	ジョン万次郎・浜口五兵衛
採録数計	70	

ある。そして、そうした功績を持つモデル人物の多くは、西洋人から採られている。一方、戦前までに多かった日本の武人・軍人や政治家、あるいは封建時代に生きた人物、一国の利益のみに寄与する功績を持つ人物などは、伝記教材からは排除されているのである。

#### 4 戦後初期検定教科書伝記教材の描かれ方

モデル人物の職種は、その人物がどのような領域で功績をあげたかを示すものである。その意味で、教科書がどの分野の人物を高く評価したかについての判断材料を示すものと言えよう。一方で、教材が具体的にどのように描かれたかを検討することも必要である。そこで、伝記教材の記述について、自然の描かれ方、科学的精神の重視、協力者の存在の3つの観点から検討を行う。

##### 4.1 伝記教材における自然の描かれ方

モデル人物に自然科学者が多いこととも関連するが、伝記教材で相対的に多く見られるのは、自然が、人類に対する脅威、乗り越えなければならない障害として位置づけられ、描かれていることである。林猷「細菌とたたかう」という題名に典型的なように、自然は時には「たたかう」べき対象としてとらえられる。パストゥールや北里柴三郎における細菌、シュバイツェルにおける伝染病などは、「敵」とし

ての自然の一例である。

自然を戦うべき「敵」ととらえる記述は、探検家などの伝記教材にも表れる。リビングストンにおけるアフリカなど、モデル人物の前には命を脅かす自然の脅威、障害としての自然があり、それを乗り越えることがその人物の功績となるのである。伝記教材には分類されないが、この時期には高峰の登山記も採録されており、同様の発想によるものであると考えられる。

また、キュリー夫人におけるラジウム、ニュートンにおける万有引力のように、自然が発見すべき対象として描かれることもある。これも、モデル人物が解決しなければならない障害として自然が措定されている点で、前述の発想と通底している。

これらに共通するのは、「未知」の自然が乗り越えるべき対象として設定され、それとの「戦い」とそれへの勝利がモデル人物の功績になる、という図式である。未知の細菌、未知の物質、未踏の大陸といった、人類にとって「未知」の自然世界を、困難に打ち勝って乗り越えることが、人類に対する貢献なのである。こうした自然のとらえ方の根底には、「未知」の領域に対して人類が挑戦し、それを「既知」のものに変えること、それによって人類の版図を広げることが、人類に対する貢献であるという図式がある。

ただし、ここでいう「人類」という語が、西欧文明とほぼ同義で用いられることが多い点には注意すべきであろう。「未知」は西欧文明にとって知られざるゆえに「未知」とされるのである。たとえば、アフリカに対しては次のような記述がなされる。

土人を救う。土人を自分たちと同じ文明の恩恵に浴させてやらねばならない。これがシュバイツェルの願いでありました。しかし、人々にはそういう彼の考えかたが十分に理解できませんでした。シュバイツェルにそんなことをしてもらうより、大学の教授であり、名オーガニストであってほしい。なにもわざわざアフリカへなんぞ行ってもらわなくても、だれかほかに行く人があるだろうじゃないか。たとえ無いとしたところが、たかが黒人だ。そんな、かばや、わにや、ぞうや、とらなどと暮らしている者のことなんか、人間なみに心配してやる必要はない、これが偽りのないみんなの腹でした。

(吉江喬松「アフリカの英雄」 富山房『新生国語 一下』)

「シュバイツェルの願い」であり、読者も肯定的に受容する記述であろう「土人を自分たちと同じ文明の恩恵に浴させてやらねばならない。」には、「土人」に対す



る「文明」の優越が示されている。いまだ西欧化されていない「アフリカ」や「土人」を文明化＝西欧化することが、アフリカを救うこととされているのである。

このような「西欧による文明化＝発展・進歩」というメタファーは、リビングストンを取り上げた次の教材の記述にも見られる。

暗黒の大陸。今でこそ、アフリカの地理も調べつくされ、交通も、陸に水に空に、縦横に開けてきていますが、十九世紀の中ごろまでは、本当に「暗黒」の名にふさわしい所でした。海岸から百マイルも奥に行けば、北の部分と、南のごく一部分とをのぞいては、全くどうなっているのか知る人もない所でした。恐ろしい炎熱の地、深い密林と荒野、そこには野蛮な土人が住み、猛獣が荒れくるとい、悪い病気が広がっているというようなことのほかは、白人種として、だれも知る者はなかったのです。そこに足を踏み入れる勇気のある者もありませんでした。だから、そのころのアフリカの地図といえ、内部の方は全く空白のままになっているというありさまだったのです。

(阿部知二「アフリカの父」 学校図書『中等国語 二』)

当然、「全くどうなっているのか知る人もない」のは欧米人から見た記述であり、アフリカ内陸部に住まう人にとって、そこが「全くどうなっているのか」わからないわけではない。アフリカは、欧米にとって「未知」であるゆえに「暗黒の大陸」なのである。それゆえ、そこを「既知」の地に変えたことが、リビングストンの功績として記述される。

アフリカの例は自然の範囲を若干逸脱しているが、自然に対しても同様のことが言えよう。西欧近代文明にとって既知のものとなった時、あるいは西欧の近代科学によって可視化された時、自然は乗り越えられる。伝記教材が描く人間像は、欧米の近代社会、及びその科学的思考にのっとった人類の版図の拡大を評価するという基軸に沿って描かれているのである。

#### 4.2 伝記教材における科学的精神の重視

伝記教材のモデル人物に自然科学者が多いことで、必然的に伝記教材に登場する人物の行動は科学的精神に沿ったものとなることが多くなる。ここで言う科学的精神とは、たとえば合理的、実証的、論理的などと形容される思考法として具体化される。人物の評価は、そうした思考法を持っているかどうかという尺度で測られるのである。たとえば、ニュートンのりんごの逸話については、次のように記述され

ている。

りんごの実が地面に落ちるくらいのことは、だれでも古い昔から知っているのですし、ニュートンがそれを見て、偶然に何か思いついたところで、それはきっと、もっと別のものであったにちがいません。ところで、この別のことというのが科学的には非常にたいせつなので、それがわからなくては、ニュートンのほんとうの偉さが知られないのですから、そこでニュートン自身の書いた書物の中から、その問題をどんなふうに解いていったかを、ここにお話したいと思います。

(中略)

それにしても、月はどのようにして地球に落ちないのでしょうか。りんごは落ちるけれども、月は落ちない。これがたぶん、ニュートンの最初の疑問ではなかったのでしょうか。つまり、月を問題にしたところに、ニュートンの人なみすぐれたするどさがあったのです。

そこで、ニュートンは、はっきりとした論理を追求していきました。

りんごが落ちるならば月もまた落ちなくてはならない。それなら月は、はたしてどんな速さで落ちているかを計算してみよう。これがニュートンの研究の出発点でありました。(石原純「ニュートン」 学校図書『中等国語 一』)

この記述は、万有引力の発見という結果よりも、そこへたどり着く思考過程に主眼をおいたものとなっている。つまり、取り上げたモデル人物を功績のみによって評価するのではなく、論理性、実証性といったその人物の思考のあり方に評価の観点が求められているのである。迷信や思い込みに縛られず、事実に基づいて論理的に思考する人物を高く評価する記述は、科学者以外の人物についても見られる。たとえば、自然科学者ではない福沢諭吉に対しても、「実証性」を重視する次のような記述がなされている。

「実証的」という用語がある。哲学や科学の方面でよく使われ、単に思惟によって捕えるのではなく、経験的事実の観察と実験によって積極的に証明し、また証明しうることをいう。(中略) 福沢はコントのように実証主義の哲学を説きはしなかったが、その精神は純粋に実証的であった。

(西村孝次「福沢諭吉」 中教出版『国語の教室 二』)

こうした科学的精神の重視には、『新教育指針』で示された戦後教育の方向性が影響していると推測される。<sup>(7)</sup>『新教育指針』では、戦後教育の目標として「科学的教養の普及」が取り立てられ、科学的精神として「合理的精神」「実証的精神」が挙げられている。こうした科学的精神は、いうまでもなく近代的精神の一形態と言えるものであり、こうした科学的精神を持った人物像が、求められる人間像としてこの時期の教科書では特に重視されている。

#### 4.3 伝記教材における協力者の存在

伝記教材には、モデル人物を援助する協力者が多く登場する。それは両親や家族であったり、援助を与える友人であったりするが、いずれの場合でもモデル人物は協力者によって支えられ、その目的を達成することができる。たとえば、ヘレン＝ケラーにはサリバンが、パストゥールには助手や妻が、モデル人物を支え、援助する協力者として登場する。モデル人物が障害を乗り越えるにあたって、これらの協力者は重要な要素になっている。個人では乗り越えられない障害も、他者との協力によって乗り越えることができるのである。伝記教材の中には、こうした協力者の存在を強調する記述も見られる。

また忠敬の偉業を思う時、忘れてならないのは、彼のために機械をつくってくれた人たちである。そのころには、江戸幕府は長崎を開港し、禁書令をゆるめてはいたのだが、外国製の測量器械は容易に手にはいるものではなかった。もしもこの時忠敬のもとに忠じて、精密な機械を作ってくれる良工がなかったならば、あれまで成功できなかったかも知れない。その製作者、江戸の金大工の弥五郎、弥三郎父子と、京都の戸田東三郎の名は、忠敬の地図のために、隠れた功労者として記憶されなければならない。

(武藤勝彦「伊能忠敬と高橋父子」 富山房『新生国語 二上』)

協力者の存在は、モデル人物の功績が個人の才能や努力のみによってではなく、他の人々との共同作業として成し遂げられるものであることを、伝記教材が示唆しようとしていることを示している。

唐澤は、国定社会科教科書を分析する中で、そこで描かれた人物像を「徹底的に社会的相互依存関係に目覚め、社会からの恩恵を受けながら、同時に社会に対して一定の貢献をしていく人間像<sup>(8)</sup>」とまとめている。唐澤のいう「社会的相互依存関係」を具現化した一つの形が、伝記教材における協力者の存在であると言うことが

できよう。

## 5 お わ り に

戦後初期の中学校検定教科書の伝記教材では、文化人、特に自然科学者が重視され、多く採録されている。本稿では、これらの伝記教材を中心に、そこに描かれている人間像について検討を行った。それは、次のようにまとめることができる。

- ① 伝記教材では、自然は「敵」もしくは「障害」として位置づけられ、それを乗り越えることに意義が認められる。つまり、人類にとっての「未知」の領域を征服し、「既知」の領域を拡張することが、人類に対する貢献になる。ただし、ここでの「人類」とは西欧文明に属する人間を指している。したがって、西欧文明の基準に沿って「既知」の領域を拡張することが、人類に対する貢献であるととらえられる。
- ② 既知領域の拡張にあたっては、実証性、合理性といった科学的精神が重視される。これは、戦後教育が科学的精神を重視したことを反映している。
- ③ 為すべき行為は、社会的相互依存関係に基づいた他者との共同作業によって達成されるものであり、個人のみの力で成し遂げられるものではない。

つまり、科学的精神を持ち、他者からの援助や協力を得て、文明社会を拡張することに寄与する人間が、伝記教材を通して示された近代的人間像の一典型であると言える。

一方、伝記教材に登場する「家族」の意義、青少年期を描いた記述の検討、道徳・倫理に対する示唆など、本稿で扱った事項以外にも検討すべき観点は残されている。それらについては、今後の課題としたい。

## 注

- (1) 文部省 (1946) 『新教育指針 第一分冊—第一部 前ぺん 新日本建設の根本問題—』 p. 4
- (2) 文部省 (1946) 『新教育指針 第二分冊—第一部 前篇 新日本建設の根本問題—』 p. 57
- (3) 大膳は、シュブランガーの六類型 (理論型、経済型、審美型、社会型、政治型、宗教型) に自己成長型を加えた七類型で、登場人物の価値指向の傾向を分類している。
- (4) 大膳 (1987) pp. 57-59
- (5) 国立教育研究所附属教育図書館他 (1986) において伝記として分類された教材を、発表者がまとめた。

- (6) 日本書籍『国語生活』, 東京書籍『新しい国語』, 中教出版『国語の教室』の3種では採録数が2編であったのに対し, 富山房『新生国語』は12編を採録している。
- (7) 『新教育指針』では, 戦後の教育の目標として「軍国主義及び極端な国家主義の除去」「人間性・人格・個性の尊重」「科学的水準及び哲学的・宗教的教養の向上」「民主主義のてつ底」の4点が示されている。また, 上記の目標を具体化したものとして, 「個性尊重の教育」「公民教育の振興」「女子教育の向上」「科学的教養の普及」「体力の増進」「芸能文化の振興」「勤労教育の革新」の七点について記述されている。
- (8) 唐澤 (1956) p. 636

### 引用・参考文献

- 阿武 泉 (2004)「戦後高等学校国語教科書データベース」(私家版)
- 大膳 司 (1987)「モデルのパーソナリティ特性」(片岡編 (1987) pp. 54-67)
- 唐澤富太郎 (1951)『教科書の歴史』創文社
- 片岡徳雄編 (1987)『教科書の社会学的研究』福村出版
- 国立教育研究所附属教育図書館他 (1986)『中学校国語教科書内容索引』教科書研究センター
- 文部省 (1946)『新教育指針』
- 太田佳光 (1987)「伝記教材の政治性 (2) 一政治家像の描き方」(片岡編 (1987) pp. 44-53)